



# 日本ベネズエラ協会会報第167号

♥ ¡Felíz día de la Madre! ♥

2016年5月1日

## 1. ニュース&トピックス

### ベネズエラ国会、マドゥロ大統領の罷免国民投票実施法を可決

野党が過半数を占めるベネズエラ国会は、4月20日、マドゥロ大統領を罷免国民投票にかけるよう求める法律を可決した。

ベネズエラ憲法はいくつかの国民投票について定めているが、その要件、タイミングおよび方法等の詳細について規定した法律はこれまで存在しなかった。そこで野党はマドゥロ大統領を罷免国民投票にかけるための手続きの明確化を求めた。憲法では選挙によって選出されて公職にあるすべての者につき、その任期の半分を過ぎた段階で罷免され得ると定められている。

2013年4月19日に就任したマドゥロ大統領の場合、今週に任期6年の半分を迎えたことになる(マドゥロはチャベス大統領が死去した2013年3月から同大統領の後を継いでいる)。しかし、同法はマドゥロ自身によって公布されるか、あるいは最高裁によって合憲性を審査される必要がある。他方、最高裁は本年1月、17年ぶりに野党が国会の過半数の議席を占めることになってからは国会の決定をことごとく妨害している。(4月21日、BBCMundo)

### 選挙管理委員会、罷免国民投票を妨害

チャベス派によって占められている国家選挙管理委員会(CNE)は、野党が進めるマドゥロ大統領罷免国民投票の実施につき種々の妨害工作をはかっている。

立法府の決定が最高裁判所に加え国家選挙管理委員会からも阻止されていることを受け、野党はこのままでは社会的騒動が起こる可能性があると考えている。野党リーダーのカプリレスは政府に対し「国は今や爆弾同様であり、いつ爆発してもおかしくない」と述べ、国民の意思を尊重するよう求めた。(4月21日、El País)

### ベネズエラ、全国で40日間の電力配給制度を実施

マドゥロ政権は、4月21日、ベネズエラは1か月以上にわたり電力配給計画を実施すると発表した。ルイス・モタ、エネルギー大臣は40日間、ないし“必要な期間”、全国において毎日4時間の停電を実施すると述べた。電力配給計画はこれまで対象外とされていた首都カラカスも含まれる。この数年来停電は頻繁に発生しているが、全国規模で正式な電力配給計画が実施されるのは2009年以来となる。政府は4月および5月の金曜日を公共機

関の休日と定め、ショッピングセンターに対し開店時間の短縮を命じている。また電力の大口消費者には自家発電を行うよう指導している。さらに節電のため国内時間を5月1日から30分早めると発表した。

政府は電力不足の原因をエル・ニーニョ現象による早魃のためグリ水力発電所等、国の電力の60%を賄う水力発電所の水位低下によるとしているが、専門家はこの17年間社会主義政権が必要な投資、メンテナンスおよび計画を怠ってきた所為であるとしている。

(4月21日、BBC Mundo)

## 2. 寄稿： 広島へ向かったベネズエラ人

本郷 良和

### 1. はじめに

「日本で学んだことを、仕事で活かしたい。まずは高倉式コンポストを学校で実践し、小学校の先生と生徒に教えて生ごみの減量活動を始める。そして市役所や学校関係者のサポートがあれば、地域の取り組みとして実行できるかもしれない。研修の最終発表ではこのアイデアをプレゼンしてきたよ」

意気揚々と目標を語る友人の姿を見ながら、私はふと考えました。彼の意志はどれだけの日本人に伝わっているのだろうか。

国際協力機構（以下、JICA）は、技術協力スキームの一環で開発途上国から各種課題の解決に携わる人材を研修員として日本に招聘し、日本の知識や技術を伝える課題別研修を実施しており、その数は年間400コースに及びます。コースによっては参加人数やターゲットとされている国が限定されているため、研修員は選抜されることになります。ベネズエラで出会ったこの友人は課題別処理研修「廃棄物管理技術（応用、技術編）」（2014年度）に応募し、約20人いた応募者の中からJICA研修員として選ばれ、日本へ渡航することができました。研修中には環境教育、廃棄物処理方法に加え、日本文化を学び、ベネズエラ文化を紹介する機会にも恵まれたと帰国後に話を聞かせてくれました。しかし、この時に上記の疑問を感じました。JICAが実施している本邦研修招聘プログラムについては、実施機関がウェブサイトを通じて実績の報告がなされており、研修員も帰国後はJICA現地事務所、家族、友人に研修の成果を伝えています。その一方で、研修生が日本で培った体験や思いを、自らの言葉で日本人へ伝える機会はどれだけあるのでしょうか。

本稿は、私が青年海外協力隊のボランティア活動を通して出会ったベネズエラ人の友人が、JICAが実施する課題別研修に参加した時に、日本の技術を学ぶだけでなく、日本人の心情や礼節を理解していく過程を扱っています。これが開発協力の見方に対する一助になれば嬉しい限りです。

### 2. SADAKOを知るベネズエラ人

ベネズエラの北東部に位置するヌエバ・エスパルタ州のマルガリータ島には、ベネズエ

ラに 2 館しか存在しない海洋博物館のうち 1 館がマカナオ半島市のボカ・デ・リオで運営されています。1994 年 11 月 19 日に開館したマルガリータ海洋博物館には、マルガリータ島の漁業産業、各種魚介類、真珠の展示館だけでなく水族館や売店もあるため、Plan Vacacional と呼ばれる子供たちの遠足の受け入れも積極的に行う教育機関としても知られています。その海洋博物館の脇には、海洋研究で有名な Universidad de Oriente (UDO) が隣接しており、その食堂では教員・学生・観光客等が食事をするのが日常となっています。私がこの食堂で SADAKO の名を耳にしたのは、JICA ボランティアの活動が 1 年半を迎えようとしていた時でした。

「俺も折り紙をやっているよ。SADAKO の話も知っている。日本に行って SADAKO の像を見に行くのが夢なんだ」

ベネズエラ人の青年は訪日の夢をそのように語りました。彼の名は Victor Hernandez (以下、Victor)。私が青年海外協力隊の活動中に会ったベネズエラ人の友人の一人です。この時に Victor が口にした SADAKO とは、原爆投下後の黒い雨で被爆し、白血病で亡くなった佐々木禎子さんです。彼女のために折られた千羽鶴の話を、Victor は知っていました。

Victor はベネズエラのメリダ州で生まれ育ち、7・8 歳の時に父が手掛ける Chimo と呼ばれる手工芸品の見学を訪れる外国人を見て、「彼らのように話したい」といつも思っていました。高校卒業後には英語を学び始め、ロス・アンデス大学入学後には環境保護、地球温暖化、外国語、言語学を学び、在学中にはメリダ州科学技術博物館で働き始めました。大学卒業後はヌエバ・エスパルタ州のマルガリータ海洋博物館で 5 年間働くこととなります。2013 年にはメキシコで環境保護のボランティア活動を行い、この頃から彼の心に「外へ出たい」という海外志向が強くなり始めました。その矢先に私と出会うこととなります。

Victor と出会ってから 1 年が経過した時、私は JICA ボランティア活動の任地であるヌエバ・エスパルタ州でマルガリータ日本文化祭というイベントを企画していました。任地では国際交流イベントの機会が全くと言っていいほどなく、現地人が日本文化に触れる機会というのは皆無でした。その会場を探していた時に Victor へ企画を持ちかけたところ、彼の勤務地である海洋博物館で実施できないかと館長へ掛け合ってくれ、私たちの提案は受け入れられました。

JICA VENEZUELA 支所よりマルガリータ日本文化祭の予算を頂いていたため、最低目標人数として掲げた 100 人は何としてでも達成しなければいけませんでしたが、原爆展を行う関係から開催日は 2016 年 8 月 6 日の平日となっており、100 人以上も集まるかどうかは定かではありませんでしたが、Victor は自信を崩しませんでした。

「大丈夫だよ。必ずたくさんの方がくる」

この言葉に後押しされたかのように、マルガリータ日本文化祭当日には 900 人以上のベネズエラ人や海外旅行者が訪れる形で大盛況に終わりました。この時、Victor に何らかの形で恩返しができないかと思っていた時、JICA VENEZUELA 支所から頂いた課題別研修の連絡を思い出しました。

2014 年度 課題別処理研修「廃棄物管理技術（応用、技術編）」一。

2008 年 7 月 22 日、北九州市は政府から環境モデル都市として認定されたことで知られています。1980 年には財団法人北九州国際技術協力協会（KITA）が発足し、1986 年度から本格的に国際協力事業団（現:JICA）の環境研修コースの受託を開始しました。JICA VENEZUELA 支所から紹介された課題別処理研修「廃棄物管理技術（応用、技術編）」は KITA によって企画・実施されてきたものです。募集要項では対象となる途上国が指定されており、その中にベネズエラの文字がありました。Victor は英語が堪能で、環境教育の実務経験もあります。応募したら日本で実りある研修を全うできるかもしれないと感じた私は、Victor へ研修への応募を強く勧めました。

Victor が研修へ応募をしてから約 1 か月が経ち、JICA VENEZUELA 支所より訪日決定の連絡が届きました。その瞬間は渡航前の不安と嬉しさのあまり、子供のようにはしゃいで実家の母親に電話したそうです。

「日本にいったら休日を利用して広島に行きたい。SADAKO の像、原爆ドーム、平和記念資料館にも足を運んでみたいんだ。どうやって行けばいいかな？」

Victor に広島への交通手段について聞かれたので、パソコンの画面を見せながら私は案内を始めました。研修の宿泊先は北九州にあるので新幹線が使えること、広島には原爆ドーム以外に宮島という世界遺産もあること。日本に行きたいと常にその夢を語っていた Victor に、日本の観光名所を案内する時間は至福のひと時でした。私自身も大学時代から外国語や途上国事情について学んだ後に、JICA ボランティアとしてベネズエラに赴任したので、Victor が海外を目指したい気持ちを理解していたからです。

「俺も折り紙をやっているよ。SADAKO の話も知っている。日本に行って SADAKO の像を見に行くのが夢なんだ」

案内しながら常に思い出していたのは、訪日を夢見ていた Victor の姿でした。彼がその夢を口に出してから半年後、まるで広島へのレールが敷かれていたかのように夢が実現することになります。

### 3. El valor de respeto

AVEXJA (Asociación Venezolana de Ex-Becarios en Japón) は 1988 年に JICA 本邦研修へ参加したベネズエラ人によって設立され、現在は JICA 研修の体験をベネズエラで伝え、関連機関と連携して研修参加者のサポートを行っている団体です。AVEXJA に寄稿された研修体験談の中には Victor の手記が残っています。

「日本滞在中に一番印象に残ったのは El valor de respeto です」

El valor de respeto の意味を詳しく知りたいと思い、この原稿を執筆する際に Victor へ直接インタビューしました。研修で得た日本の印象を El valor de respeto と表現した理由の一つで語れるものではなく、それを裏付ける複数のエピソードを紹介してくれました。

ベネズエラのシモン・ボリバル国際空港からエールフランスの飛行機に搭乗した Victor

はパリへ向かい、そこで東京行きの飛行機へと乗り換えます。まずはそこで日本人の旅行者と出会いました。

「東京行きの便では隣の席に日本人の男性が座っていて、話しかけてみると世界中を旅行している方でした。日本で生活する上でのアドバイスをもらったり、ノートにお薦めの日本食も書いてもらいました」

東京へ到着すると、今度は福岡行きの便へ乗り換えなければいけませんでした。Victor は出発便のターミナルへ向かうバスがどれなのかが定かではありませんでした。いくつもの階段を下っていき、たまたま近くにいた日本人の女性に英語で話しかけたのです。

「福岡行きの飛行機はどこですか？ ターミナルへ向かうバスはどこですか？」

突然外国人に英語で質問された女性は Victor の質問が分からず、Victor もその女性の日本語を理解できませんでした。彼女はそばにいた 7 人の日本人へ助けを求め、7 人は協力して Victor をバスの発着地まで案内してくれました。

「すべて日本語で説明されたので言葉は全く理解できませんでしたが、ターミナルへ向かうバスには無事に乗ることができて福岡へ向かうことができました。本当に助かりました」

日本に到着した初日のことをこう振り返る Victor は、研修開始後に直面した交通機関のトラブルもたまたま近くにいた日本人と乗り切っています。

「ある晩、一人で小倉に行こうと思って外に出ました。宿泊所は八幡にあり、小倉はそこから電車で 5 分くらいだったと思います」

Victor が駅に着くとプラットホームにいた日本人の若者に確認しました。

「次にくる電車は小倉に停まりますか？」

「はい、停まります」

彼の言葉を信用した Victor は何の疑いもなく電車に乗りますが、なんとその電車は小倉駅を通過してしまいました。Victor はおもしろくて笑っていましたが、日本人の若者は大変なことをしたと思ったらしく、おろおろしていました。

「大丈夫ですよ、心配しないでください」

Victor はこう伝えましたが、彼は Victor が一人で小倉に向かう乗り換えの心配までしてくれ、小倉駅へ戻る電車を確認して一緒に乗車し、駅の出口まで Victor を見送りました。その時の彼は汗だくだったそうです。

「すごく心配してくれたので嬉しかったです。別れ際には、“You are very kind. Thank you so much.”と書いた紙を渡しました。日本語訳をどこかで見つけてくれたらいいのですが」

Victor を案内をしてくださった日本人の方々に共通していたのは、英語を話せなくても困った外国人を助けようとした姿勢です。そして停車駅が間違っていたとしても、最後まで Victor を案内し続けた若者の話は、日本人の私も聞いていて嬉しく思いました。大事なのは語学力ではなく、気持ちだと感じさせてくれるエピソードです。

研修半ばには、Victorを含むJICA研修員が1日だけホームステイをする機会が与えられました。Victorを受け入れたご家族は、下関や門司港へ連れていき、夜遅くまでおもてなしをしてくださったそうです。

「一日だけホームステイした時があったのですが、ホストファミリーはとても親切で素晴らしい1日を過ごせました」

ところが、JICA九州の門限が11時だったことをVictorはホストファミリーへ事前に伝えていませんでした。ホストファミリーがそれを知ったのが10:40だったそうです。

「門限の話をしたらホストファミリーはびっくりして、慌てて送ってくれました。10:40に出発し、11:00前には戻ることができました。今思うともう少し早く言えばよかったと反省しています」



**West House Japanでの茶道体験  
(Victorと研修員)**

日本の伝統文化である茶道にも触れる機会もありました。West House Japanで通年2回だけ催される茶道体験にVictorを含むJICA研修生が招待されたのです。Victorだけでなく、別のコースに参加していたJICA研修生も茶道を体験できるように、KITAが事前に予約をしてくれていたのだそうです。

「全てが映画のようでした」

茶道の体験をそのように述懐したVictorは、JICA研修を通じて日本人が積み重ねてきた思想の根源に触れることができた時、そしてKITAが主催したサッカー

ゲームの観戦後に日本人の観客がゴミを放置せずを持ち帰る姿を目にした時、日本が戦後に大きく発展してきた理由を垣間見たと述べています。

「儀礼を重んじる文化は、日本が発展してきた一種の礎であり、世界の人たちが忘れているものでもないでしょうか。家族、隣人、友人と、礼が行動の基礎となる場所で共存していけるのを願っています」

#### 4. 夢と目標

「涙が止まりませんでした。まるで子供のように泣いてしまいました。とても美しかったです」

広島で「原爆の子の像」を見た時、そして広島平和記念資料館で佐々木禎子さんの写真を見た時の様子を、Victorはこのように語りました。おそらく、折り紙を始めた時からの記憶が走馬灯のように駆け巡ったのではないかと思います。

大学時代に友だちから折り紙を教えてもらったVictorは、独学で折り紙の勉強を始め、



電球等のオリジナルの折り紙を作り始めます。自室でワインを飲みながら折り紙を折るのが楽しみとしていた **Victor** は、メリダ州科学技術博物館で働いていた時には折り紙セミナーを担当し、子供たちに折り紙を教え始めました。その時に **SADAKO** のストーリーを知ります。

「**SADAKO** のストーリーに感動して、セミナーの冒頭にはそれを盛り込むようになりまし、今も続けています。いつの日か日本に行くことができれば **SADAKO** の像を見に行くと決めていたんです」

**Victor** がマルガリータ海洋博物館で働き始め、私と出会ったときに「日本に行って **SADAKO** の像を見に行くのが夢なんだ」と話した時から半年後、彼は広島にいました。夢が実現する瞬間は、言葉に表せない感動があったに違いありません。

しかし、**Victor** にはもう一つの夢であり目標がありました。広島に行くだけでなく、日本の課題別研修で得た知見をベネズエラへ帰国した後に実行することです。各研修員には、研修最終日にアクションプランの発表が義務付けられていました。

「**JICA** 北九州の最終日は感慨深かったです。あの日は各研修員がアクションプランを発表するときで、ものすごく緊張したのを覚えています」

一環境教育と高倉式コンポスト（対象：マカナオ半島市小学校）一。**Victor** は環境教育を専門としており、このタイトルでアクションプランを発表しました。まずはターゲットを小学校に絞り、教員と生徒へ高倉式コンポストによる生ごみの減量を実施し、活動が根付いてきたときに市役所や学校関係者のサポートを得て地域レベルへ波及させるプランです。学校関係者から何か新しい技術や知見を学べる機会はないかと何度も問い合わせを受けていた **Victor** にとって、小学生だけでなく教員もターゲットグループに含んでいたのは自然なことでした。アクションプランの発表は無事に終了し、修了証授与式が行われることとなります。そこで一つのサプライズが待っていました。

「**JICA** 九州と **KITA** はサプライズを用意してくれていて、修了式の部屋に入ると研修員の国旗が用意されていました。あの瞬間は感



広島「原爆の子の像」(Victor)



小学校での国際交流イベント  
(Victor と研修員)



コースの修了式 (Victor)

動して涙が出てきたし、同時にベネズエラへの誇りも感じました。あの時のことは忘れられません」

晴れて研修を全うした Victor は、アクションプランとは別に将来の目標を何度も語っていました。

「俺は将来 NGO を作りたい。世界中で環境保全のプロジェクトを実施して地域社会に貢献できるようになりたい。そして、環境教育の修士号を取得して日本語も学びたい」

大学入学前から海外志向を育み、折り紙を通して SADAKO を知った Victor はこれからの夢や目標を問われる時、常に環境保全プロジェクトの実施と NGO の設立を口にしていきます。それらの目標を実現する過程では、日本で学んだ

El valor de respeto の精神が役に立つのではないかと考えています。

## 5. おわりに — 開発協力について

本稿を執筆していた時に思い返していたのは、Victor の声を何らかの形で日本人に届けたいということでした。JICA 研修から帰国後、彼はアクションプランの内容だけでなく、日本で体験した儀礼をはじめ、日本食の食感、タクシー、トイレの機能に驚いたことなどを話してくれました。しかし、その体験談を耳にできる日本人は限られていました。青年海外協力隊のボランティアとは異なり、JICA 研修員が日本語を用いてブログや JICA 広報誌を通じて研修の成果報告をするのは難しく、情報発信のチャンネルも整えられていません。AVEXJA のような有志の OB/OG が運営する団体による情報公開に留まっています。そのため、ベネズエラ国内では JICA 事業の認知度が高いとは言えないのが現状です。

私が JICA ボランティアとして活動していた時、変化という目に見えた「成果」を出すというのは容易な話ではありませんでした。それは JICA の課題別研修を終えた研修生にとっても同様かもしれません。トラブルが頻繁に起こる途上国でアクションプランを実行に移し、状況を短期間で改善させるのは至難の業です。しかし、事業を通じた「成長」というのは誰にでも約束されています。それによって第 3 者の人生を豊かにし、生きがいや仕事に対するやりがいを見つけるきっかけにつながるとも思っています。

日本の開発協力は、途上国の人材育成の役に立っているのか？ 私が Victor の体験談を通じて知ったかったのはそこにありました。本稿にその答えが幾ばくかでも出ていれば幸甚です。